Iza vofin naſarei

市　井　外喜子

『天草版平家物語』巻第四第二十　大臣殿を子副将に対面あること：同じく副将を害すること　に見られる次の記述を注目してみたい。

義経が川越小太郎に副将の処分を命ずる。二人の女房が寝ている副将を起し、迎えの車に乗せようとする。

○（川越→女房）大臣殿のすでに関東えお下りある：それがしも義経のを供に下りまらすれば、緒方がもとえ入れまらしょうずるぢゃ。を車寄せて疾う疾うと申せば、女房どもげにもと心得て、寝入らせられた若君ををしをどろかし奉り、iza vofin naſarei、を迎いに車が参ったと、申せば、若君をどろかせられて、きのうのやうに大臣殿のを方にまたござるかと喜ばせられたわいたわしいことぢゃ。

最初に上記の iza vofin naſarei を、古典平家18本によって確認することにしたい。使用した『平家物語』は、次のものである。また当該箇所の表題も記しておく。

1．国会本　新潮日本古典集成『平家物語』新潮社：巻第11第110句副将
2．京都本『平家物語百二十句本』思文閣：巻第11第110句ふくしやう
3．斬道文庫本『百二十句本平家物語』汲古書院：巻第11第110句副将
4．中院本『平家物語（中院本）の研究』未刊国文資料刊行会：第11おほいどのゝわか君きられ給事
5．城方本『平家物語　附承久記』国民文庫刊行会：第11副将
6．屋代本『屋代本高野本対照平家物語』新典社：第11平家生虜内八歳童副将殿被誅事
7．平松家本『平松家本平家物語』清文堂：巻第11生虜内八歳童福生殿被誅事
8．鎌倉本『鎌倉本平家物語』古典研究会：巻第11生虜内八歳副将殿被誅事
9．竹柏園本『平家物語　竹柏園本』八木書店：巻第11嗣将軍義宗事
10．龍大本　日本古典文学大系『平家物語』岩波書店：巻第11副将被斬
11．高野本　新日本古典文学大系『平家物語』岩波書店：巻第11副将被斬
12．葉子十行本　日本古典全書『平家物語』朝日新聞社：巻第11副将被誅

13. 流布本『平家物語』おうふう：巻第11副将被斬
14. 南都本『南都本・南都異本平家物語』汲古書院：巻第12目録を欠く。（国会本巻第11第110句副将に相当する。）
15. 四部合戦状本『四部合戦状本平家物語』汲古書院：巻11副将
16. 延慶本『延慶本平家物語』勉誠社：巻11$_{30}$大臣殿父子関東へ下給事
17. 長門本『平家物語長門本』名著刊行会：巻第18大臣殿父子関東下向事
18. 源平盛衰記『新定源平盛衰記』新人物往来社：巻第44頼朝義経中悪し　附屋島内府の子副将亡ぶる事

日葡辞書（『邦訳日葡辞書』土井忠生・森田武・長南実編訳　岩波書店）の記述を示しておく。

Vofin または vofiru

貴人が眠りから目をさますとか起き上がるとかすること。

例. Iza vofin are または nasarei[1)]

あなたさま、さあお起きあそばせ、など、婦人語

[1)] イザオヒンナサレイ、御迎イニ車ガ参ッタ（Feiqe、p.358）

1　iza vofin naſarei

天草版平家では、「iza vofin naſarei」がみられるのは、巻第四第二十　大臣殿を子副将に対面あること：同じく副将を害すること　の１例のみである。

「iza vofin naſarei」該当部分を比較対照した結果を、最初に表にまとめて示すと、次のようになる。

	天草版	国会本	京都本	斬道文庫本	中院本	城方本	屋代本	平松家本	竹柏園本	鎌倉本	龍大本	高野本
iza vofin naſarei いざ、させ給へ	○	○	○	○	○	○	○	○	○			

葉子十行本	流布本	南都本	四部合戦状本	延慶本	長門本	源平盛衰記	口語訳
							さあ、お起きあそばせ。 さあ、いらっしゃいませ。参りましょう。

この表からは、天草版平家の iza vofin naſarei（さあ、お起きあそばせ）と一致する古典平家が１本も見られないことは、明白である。

国会本・屋代本の２本における該当箇所を示すと、次の通りである。

○国会本

河越の小太郎、女房どもに申しけるは、「大臣殿、すでに関東へ御下り候。重房も判官の御供に下り候へば、若君を緒方の三郎がもとへ入れまゐらすべきにて候。御車寄せて、とくとく」と申せば、女房ども「まことぞ」と心得て、寝入り給へる若君をおどろかしたてまつり、「いざ、させ給へ。御迎ひに車の候」と申せば、若君おどろかされて、「昨日の様に大臣殿の御方へ、また参らんずるか」とよろこび給ふぞいとほしき。

○屋代本

河越女房共ニ申ケルハ、「大臣殿既ニ関東へ御下候、重房モ判官ノ共ニ下候ヘハ、若君ヲハ緒方三郎カ方へ入進スヘキニテ候。御車寄テ候。疾々」ト申ケレハ、女房共ケニソト心得テ、ネイリ給タル若君押驚シ奉リ、「イサヽセ給へ。御迎ニ御車ノ参テ候ハ」ト申セハ、若君驚テ、「昨日ノ様ニ大臣殿ノ御方ニ又参ンスルカ」ト悦給ソ糸惜キ。

上記の「国会本・屋代本」と同じように、「いざ、させ給へ」相当箇所を有するのは、表にあるように「京都本・斬道文庫本・中院本・城方本・平松家本・竹柏園本」である。

古典平家８本に見られる「いざ、させ給へ」相当箇所が、天草版平家では、「iza vofin naſarei」である。この点のみが、大きな特徴を示すことになる。

天草版平家において「iza vofin naſarei」とみられる点を、吟味したい。

古典平家とまったく同じ場面において、古典平家の「いざ、させ給へ」が、天草版平家において「iza vofin naſarei」と改めたのは、編者不干ハビヤンの工夫によるところであろう。

女房どもげにもと心得て、寝入らせられた若君を voxivodorocaxi 奉り、（＝お起し申し上げ）iza vofin naſarei、（＝さあ、お起きあそばせ）を迎いに車が参ったと、申せば、若君 vodorocaxerarete、（＝目を覚まされて）

のように、「iza vofin naſarei」の前に、「voxivodorocaxi（＝眠っている人を強くゆすぶって、目ざめさせる）」があり、後に、若君「vodorocaxe（＝眠りからふっと目覚め）られて」がある。「いざ、させ給へ」を、前後の叙述にあわせて「iza vofin naſarei」と改めたのは、外来宣教師の日本語テキストとしての配慮と思われる。行動内容を、より具体的に示し、テキストの理解を容易にしたものである。

さて、「iza vofin naſarei」・「いざ、させ給へ」相当部分を持たない、古典平

家の様子をも見ておくことにする。「高野本」をまずとりあげる。

○高野本

河越小太郎、二人の女房どもに申けるは、「大臣殿は鎌倉へ御くだり候が、わか公は京に御とゞまりあるべきにて候、重房もまかり下候あひだ、おかたの三郎維義が手へわたしたてまつるべきにて候。とうとうめされ候へ」とて、御車よせたりければ、わか公なに心もなう乗り給ひぬ。「又昨日のやうに、ちゝ御前の御もとへか」とて、よろこばれけるこそはかなけれ。

天草版平家・国会本等と大きく異なるところは、前述の二人の女房が、寝ている副将を起し、迎えの車に乗せる場面を欠いているところである。「(略) とうとうめされ候へ」とて、御車よせたりければ、わか公なに心もなう乗り給ひぬ。と簡潔な描き方である。この類に属するものは、龍大本・鎌倉本・南都本である。各々異同はみられるが、南都本「トクトク車ニテ渡セ給ヘトテ車ヲ差寄タリケレハ心ナラス乗給フ」が注目される。鎌倉本は「(略) 御車ヲ寄タリケレハ、若君ハ又昨日ノ様ニ父御前ノ御許ヘカト思食テ、何心モナフソ被召ケル」とみられる。

このような本文をみると、天草版平家の依拠本としては、距離を感じざるを得ない。一方、『新定源平盛衰記』第6巻（後注）には次のような注記が見られる。

○伊藤本・八坂本・東寺本・如白本ニ曰ク。寝給ヘル若君ヲ、オシ驚カシ奉リテ、御迎ヘニ人ノ参リテ侍ルニ、イザ行カセ給ヘト申セバ、

これらの諸本は、前述の「寝ている副将を起す」場面を有する点で、国会本系統に属するものと言える。

続いて「いざ、させ給へ」・「なに心もなう乗り給ひぬ」相当部分を欠く諸本をみておく。葉子十行本・流布本が属する。葉子十行本の該当部分を示す。

○葉子十行本

重房、宿所に帰つて、二人の女房共に申しけるは、「大臣殿は明日鎌倉へ御下り候。重房も御供に罷り下り候ふ間、緒方三郎惟義が手へ渡しまゐらせ候ふべし。とうとうめされ候へ」とて、御車寄せたりければ、若君は、「又昨日の様に、父御前の御許へか」とて、斜ならずうれしげにおぼしたるこそいとほしけれ。

このような本文の簡潔な描き方は、天草版平家の依拠本としては、さらに距離をおくことになる。

さいごに読み本系4本（四部合戦状本・延慶本・長門本・源平盛衰記）をみると、これまで述べてきた部分をすべて欠き、4本それぞれの特色をみせている。

○四部合戦状本

（略）「日来の恋しさは物の数ならず」とぞ言ひける。

（天草版平家の、大臣殿を子副将に対面すること＝前半部分で了となり、巻第十二へ進む。副将を害することの後半部分を欠く。）

○延慶本

若君ハ川越小太郎が具奉テ、「桂川ニフシヅケニスベシ」トテ、グシ奉ル。（略）

○長門本

若君をば緒方三郎惟能が許に渡し参らせ候べしと申て、大臣殿の御所より車にのせ奉りて、六條河原にやり出し、（略）

○源平盛衰記

（略）茂房仰せ承りて、駿河次郎といふ中間を相具し、二人の女房に抱かせて六条を東河原までこそ出でにけれ。

4本それぞれの特色を見せ、天草版平家との乖離が大きい。

以上述べてきた諸点を表にまとめてみると、次のようになる。天草版平家との距離をはかる目安となる。

	天草版	国会本	京都本	斬道文庫本	中院本	城方本	屋代本	平松家本	竹柏園本	鎌倉本
A. iza vofin naſarei	○									
B. いざ、させ給へ		○	○	○	○	○	○	○	○	
C. なに心もなう乗り給ひぬ										(○)
D. B・C部分を欠く										
E. 記述に異なりが多い										

龍大本	高野本	葉子十行本	流布本	南都本	四部合戦状本	延慶本	長門本	源平盛衰記	備考
○	○			△					(○) 位置異同あり、△心ナラス
		○	○						
					○	○	○	○	

2　おひるなる（vofin naru）

天草版平家に見られる vofin naru をみたが、古典平家：延慶本平家物語に1例見られる「おひるなる」を記す。

○六（第三本）三　新院崩御事付愛紅葉給事

蔵人モ何様ナル逆鱗カ有ムズラムト、胸打騒テ居タル処ニ、御ヒルニ成ケレバ、夜ノヲトゝヲ出デモアヘサセ給ワズ、イトゝクカシコヘ行幸ナリテ、紅葉ヲ叡覧アルニ、故ラ跡形ナシ。（おひる＝お起きになること）

他の古典文献に見られる「おひるなる・おひなる・おひんなる＝お目ざめになる、お起きになる意の女房詞」を、記す。

○中務内侍日記

弘安八年三月一七日　かくまれて御所に御人ずくななりつれば、御ひるよりさきにと、いそぎ参りたれば

○兼顕卿記

御震（＝寝）良久、仍終日祗候。乗燭後御昼也

○お湯殿上日記

暁。御ひるなりて、御ちやうもん

○宗五大艸紙

障子の際へそと参候て、鶏のうたふまねを三声仕、雀の鳴まねを仕候へば、御ひるならせ給候て還御成候

○かた言

およれぞ、おひなれぞといふは、をんなこと葉に、やさしと云う。おひなれはお昼なれといふ心歟。

○女中詞

おひる成　おきる事

○女重宝記

女の柔らかなる詞といふは（略）起きるを、おひなる

○女言葉

おきる事　おひんなる

これらに年数を加えてみる。

1292頃　中務内侍日記　1309・10　延慶本平家物語　1476・79　兼顕卿記　1477～　お湯殿上日記　1528　宗五大艸紙　1592　天草版平家物語　1603・04　日葡辞書　1650　かた言　1692　女中詞　1692　女重宝記　1722　女言葉

他に、志不可起（1727）・物類称呼（1775）・玉勝間（1795～1812）、また雑俳・

洒落本・人情本等に、「おひなる・おひるなる・おひんなる」が多く見られる。

このように頻出する「おひるなる」は、お目ざめになる・お起きになる意の女房詞として定着していたことが、知られる。このような「vofin naru」を、「いざ、させ給へ」に代えて、「iza vofin naſarei」として用いた不干ハビヤンの工夫が注目される。

3　オヒンナル

これまで『延慶本平家物語』に1例みられる「おひるなる」を中心に、文献上に記述の出ているものをみてきた。これからは方言辞典にみられる「オヒンナル」をみていくことにする。使用した方言辞典は、次のものである。

○『全国方言辞典』東条操編　東京堂出版
○『日本方言大辞典』徳川宗賢監修　小学館
○『現代日本語方言大辞典』平山輝男編集代表　明治書院
○『日本語方言辞書―昭和・平成の生活語―』藤原与一著　東京堂出版

最初に、18世紀末に編まれた全国方言辞典『物類称呼』の「をひんなる」をみる。

をひんなる　人の寝る事を「をよる」といふは御夜るにて、「をひんなる」は御昼なるにや。

この辞書記述は『日葡辞書』(1603・04) の vofin または vofiru（貴人が眠りから目をさますとか起き上がるとかすること）に通うものである。

また、柳田国男の「あいさつの言葉」に、次のようにある。

まず第一には早朝の言葉、これは今ほとんどオハヨウの一つに統一しかかっていて、それは何をいうつもりなのかも不明になりかかっていますが、本来は早く起き出したねと、相手の勤勉を感歎する意味でありました。（略）加賀の金沢あたりでお早うをオヒナリアソバイタカ、または簡略にただオヒンナリといい、九州の下五島でもオモンナンシタというのは、ともにもう起きられたのかの小さい驚きを表わした言葉らしく、オヒナルはもちろん目を覚ますを意味する上品な語であります。（民間伝承10巻・昭和19年）

このような「オヒルナル」を、前掲の4方言辞典にあたり、作表したものを記す。

A：全国方言辞典　B：日本方言大辞典　C：現代日本語方言大辞典
D：日本語方言辞書―昭和・平成の生活語―とする。

	オヒナル（オヒンナル・オヒニナル・オヒナル等）	北海道	青森	岩手	宮城	秋田	山形	福島	茨城	栃木	群馬
A	①お目ざめになる・お起きになる ②朝の挨拶語　お早よう （③蚕の眠りから覚める）			○							
B	①起きる・目覚める意の尊敬語 ②朝の挨拶言葉		○ ○	○		○					
C	①めざめる ②おはよう										
D	オヒ類(廃語の説明地域も含める)		○	○		○					

埼玉	千葉	東京	神奈川	新潟	山梨	長野	静岡	愛知	岐阜	富山	石川	福井	三重	滋賀	京都	大阪	兵庫	奈良	和歌山
						○ ○ (○)注4					○		○						
		○			○注1	○				○	○				○	○ ○			○
											○								
		○				○	○			○	○				○	○	○		○

鳥取	島根	岡山	広島	山口	徳島	香川	愛媛	高知	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄
					○	○					○ ○	○	○ ○			
	○ ○	○注2	○ ○	○ ○	○ ○	○	○	○ ○			○	○	○ ○			
							○注3									
	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○			

注1　尊敬語の用法はない
注2　尊敬語の表示なし
注3　昔、上流階級の人たちは、オヒナリタ（目がさめた）と言っていた。普通にはオドロクを用いる。
注4　長野県の①は、西筑摩郡、②オヒンナリマシタは、邑智郡、③は、下伊那郡

この表から観察されるところを、箇条書きで示す。

1．近畿・中国・四国・九州の4ブロックでは、オヒナルの使用が注目される。

2．この西日本圏では、①起きる・目覚める意の尊敬語とともに、②朝の挨拶語として用いられるオヒナルがある。

○西日本圏の②朝の挨拶言葉の実例をあげる。

大阪　オヒナリマシテ

兵庫　オヒンサッタカ

島根　オヒンナリマシタ　オヒンナンナサイマシタ

広島　オヒナリマシタカ

山口　オヒンナリマシタ

徳島　オヒンナッテオイデルカノーヤ

愛媛　オヒンナリマシタカ

高知　オヒルヤリヤシタ

長崎　オヘンナリマシタカ（五島）

大分　オヒナリ

3．関東を中心とする東日本圏は、①起きる・目覚める意の尊敬語・②朝の挨拶言葉ともに、オヒナリの使用は希薄である。

○東京（八丈島）の朝の挨拶語は、次のものである。

オヒンナリヤッタカ（日本方言大辞典）

オヒニナリヤララ（日本語方言辞書―昭和・平成の生活語―）

4．富山・石川両県では、朝の挨拶語としてのオヒナルが注目される。殊に『現代日本語方言大辞典』の石川県金沢市は、オハヨーとの併用ではなく、オヒンナリのみである。『日本語方言辞書―昭和・平成の生活語―』には、金沢市：ヤー　オヒンナリ。（やあお早う。老男間）、オヒンナリアソバセ。（お早うございます）が、みられる。

また富山では、オヒンナリアソバイタカ（『富山県方言集成稿』（二））がみられる。

5．『日本語方言辞書―昭和・平成の生活語―』のオヒ類は、現在廃語などの説明がある所をも含めたものであるが、西日本圏の連続性をみせる出現に比して、東日本圏のオヒナルの出現度は少ない。今後のオヒナルの衰退は進むものと思われるが、慣習的な朝の挨拶語は、しばらくは止まるのではないかと思われる。金沢市の朝の挨拶語はオハヨーではなく、オヒンナリのみである。

4　まとめ

これまで述べてきたことの要点を、箇条書きにしてまとめておく。視点は『天草版平家物語』巻第四第二十　大臣殿を子副将に対面あること：同じく副将を害すること　に見られる「iza vofin naſarei」を、古典平家18本を対象として吟味するとともに、現在使用される全国版の方言辞典との比較にある。

1．古典平家８本（国会本・京都本・斬道文庫本・中院本・城方本・屋代本・平

松家本・竹柏園本）の「いざ、させ給へ。」を、天草版平家物語において「iza vofin naſarei」と改めたのは、編者不干ハビヤンの配慮によるものである。外来宣教師（主としてポルトガル人）の日本語テキストとして、用語のより具体性を重んじたためである。

寝入らせられた若君を voxivodorocaxi 奉り、（＝お起し申し上げ）iza vofin naſarei,（＝さあ、お起きあそばせ）を迎いに車が参ったと、申せば、若君 vodorocaxerarete、（＝目を覚まされて）

のように、をしをどろかし奉り、おどろかせられてが見られるところで、「いざ、させ給へ」を「iza vofin naſarei」（女房詞）に改めている。理解が容易になる工夫である。

2 「おひんなる」は、お目ざめになる、お起きになる意の女房詞として、『天草版平家物語』（1592年）出版時には、広く通用していた。（1292頃　中務内侍日記　1309・10　延慶本平家物語　1476・79　兼顕卿記　1477～　お湯殿上日記等）

○『日葡辞書』（1603・04年）には、

vofin または vofiru　貴人が眠りから目をさますとか起き上がるとかすることの例として、Feiqe、p.358イザオヒンナサレイ、御迎イニ車ガ参ッタが出ている。Iza vofin are または nasarei　あなたさま、さあお起きあそばせ、など、婦人語。

3．古典平家18本と天草版平家との距離を「いざ、させ給へ＝iza vofin naſarei」から測ると、その遠近がみえてくる。

○A（iza vofin naſarei）＝B（いざ、させ給へ）の関係を持つ８本（国会本・京都本・斬道文庫本・中院本・城方本・屋代本・平松家本・竹柏園本）は、最も依拠本に近い。

○次には、二人の女房が寝ている副将を起し、迎えの車に乗せる場面を欠き、御車よせたりければ、C（なに心もなう乗り給ひぬ）と簡潔な描き方をする４本（高野本・龍大本・鎌倉本・南都本＝心ナラス乗給フ）が位置する。

○上記の諸本（12本）より更に距離を置くのは、葉子十行本・流布本である。B および C 部分を欠き、さらに簡潔な文体となる。

○読み本系４本（四部合戦状本・延慶本・長門本・源平盛衰記）は、まったく『天草版平家物語』とは合一点をみることができない。射程距離外の諸本である。

4．方言辞典（全国方言辞典、日本方言大辞典、現代日本語方言大辞典、日本語方言辞書―昭和・平成の生活語―）と「オヒンナル」の関係をみる。

○方言辞典に見られる①起きる・目覚める意の尊敬語　②朝の挨拶言葉として

の「オヒンナル」は、東日本圏においては散在的にすぎないが、西日本圏においては連続性のある領域をみせている。

○特に注目されるのは、石川県金沢市のオヒンナリである。『現代日本語方言大辞典』の「おはよう」項目に、オハヨーとの併用ではなく、オヒンナリのみであるのは、金沢市における朝の挨拶言葉としての定着性をみせている。

○今後のオヒナルは、衰退を余儀無くされるが、慣習的な朝の挨拶語は、しばらくは止まるのではないかと思われる。

5．『天草版平家物語』に1例みられる「vofin naru＝お目ざめになる・お起きになる意の女房詞」は、出版当時（1592年）には広く用いられていた。江戸時代には一般女性の間にも用いられ、『婦人養草』『女中詞』『女重宝記』等にもみられるようになった。このように室町時代から江戸時代にかけて用いられた「オヒンナル」は、現在の方言辞典には見ることができるが、衰退を余儀なくされることになろう。

参考のために「オヒナル」に関する県別の方言集をあげておく。

青森　青森県五戸語彙　能田多代子
岩手　岩手県紫波郡長岡村方言集　堀合健一
秋田　鹿角方言考・同補遺　大里武八郎
東京都八丈島　日本語方言辞書―昭和・平成の生活語―　藤原与一
山梨　山梨鑑　小幡宗海・安藤誠治
長野　全国方言辞典　東条操編
富山　砺波民俗語彙　佐伯安一
石川　石川県方言彙集　私立石川県教育会
三重　全国方言辞典　東条操編
京都　かたこと　安原貞室
大阪　大阪方言事典　牧村史陽
兵庫　日本語方言辞書―昭和・平成の生活語―　藤原与一
和歌山　和歌山方言集　杉村広太郎
島根　島根県方言辞典　広戸惇・矢富熊一郎
岡山　児島湾方言集　岡秀俊
広島　広島県方言の研究　広島県師範学校郷土研究室
山口　阿武郡志　阿武郡教育会
徳島　阿波言葉の辞典　金沢治
香川　香川県方言辞典　近石泰秋
愛媛　西宇和郡双岩村誌　西宇和郡双岩村役場

高知　土佐方言の研究　高知県女子師範学校郷土室
長崎　五島民俗図誌　久保清・橋浦泰雄
熊本　菊池俗言考　永田直行
大分　大分県方言の研究　三ヶ尻浩

参考図書

『天草版平家物語対照本文及び総索引』江口正弘　明治書院
『平家物語』新潮日本古典集成　新潮社
『平家物語百二十句本』思文閣
『百二十句本平家物語』汲古書院
『平家物語（中院本）の研究』未刊国文資料刊行会
『平家物語　附承久記』国民文庫刊行会
『屋代本高野本対照平家物語』新典社
『平松家本平家物語』清文堂
『鎌倉本平家物語』古典研究会
『平家物語　竹柏園本』八木書店
『平家物語』日本古典文学大系　岩波書店
『平家物語』新日本古典文学大系　岩波書店
『平家物語』日本古典全書　朝日新聞社
『平家物語』おうふう
『南都本・南都異本平家物語』汲古書院
『四部合戦状本平家物語』汲古書院
『延慶本平家物語』勉誠社
『平家物語長門本』名著刊行会
『新定源平盛衰記』新人物往来社
『邦訳日葡辞書』岩波書店
『物類称呼』岩波書店
『全国方言辞典』東京堂出版
『日本方言大辞典』小学館
『現代日本語方言大辞典』明治書院
『日本語方言辞書―昭和・平成の生活語―』東京堂出版